

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

## 私のテーマ

## 永国先生に託されて（上）

ジョン万に英語を習ったある姫君の秘められた生涯

小島 博明



はじめに  
—土佐人の血、誇らしく—

A black and white photograph of a middle-aged man with dark hair and glasses. He is wearing a dark t-shirt with a graphic print on the front. He is looking slightly to his left and holding a small, dark object in his right hand. The background is an indoor setting with a window and some furniture.

故永国先生を熱く語る山本一力さん

料を、実に惜しげもなく見せてくれました。男は密かに見栄を張つて生きるもの、土佐の男の格好よさを感じました。小説は、山本「力」の名で出るがその裏にはたくさんの人々の支えがある。感謝の気持ちを忘れず、「書き続けたい」と結んだ。誰もが納得でうなづき合つたものである。

本題に入ろう。永国先生が亡くなられる数カ月前のことである。も

山本一力さんは「永国先生は、ご自分が苦労して集められた貴重な資

た。会には永国さんと親交があり、また、現在長編ジョン・マンを執筆中の作家山本一力さんも出席、熱く故人を語った。そして会場にはもう一人のジョン万研究家、北代淳二さん、ハワイプナホスクールのひろみ・ピーターソン先生ら120人が参加した。

た永国淳哉先生の没後1年の追悼会が昨年10月11日生前永国先生が研究室代わりに使っていた高知市浦戸町にある喫茶店「鯨人カフエ」で開かれ

## はじめに —土佐人の血、誇らしく—

そんな折、ジョン万次郎がアメリカから土佐に帰ってきた（1852年）。万次郎は英語を話し、日本語をほとんど忘れていた。その万次郎に、日本語を改めて教え、万次郎からは英語を学ぶというスタッフの一人に屋門姫が加わっていた。当時、視野の広い吉田東洋、また少年後藤象二郎がいた、ジョン万から事情を聴いた画家の河田小龍は「漂異紀略」を作成している。屋門姫

生まれは天保9年（1838）6月。土佐山内家筆頭家老佐川深尾家（二万石）の姫である。その時代土佐藩は海防のため、西洋砲術を導入していた。深尾家でも日々調練に励んでいた。成長した屋門姫は、西洋砲術を中心とする西洋学に興味を持っていてオランダ語を理解し、周囲を驚かせたという。

もう一つの悲話  
英語を習ったばかりに

この話に私は感動を覚えた。そこで、私なりの考察、解釈を加えたながら、まとめてみることにした。

はこれまで先祖の恥をさらすことでの  
口外無用とされてきました。でも  
子孫の私としては恥ずべきことでは  
なく、逆に誇るべきことと考えま  
した。先祖の供養のためにもぜひ世に  
出してほしい」。

とは永国先生のところに持ち込まれた話である。持ってきたのは、老佐川深屋家の姫として生まれた深尾屋門（やもん）の家筋と名乗り、数点の資料も持つてこられた。それ以上に、ここに来るきっかけを聞いて興味が湧き立ったという。「先祖の事蹟を語る人。土佐山内家筆頭家老佐川深屋

アメリカの事情に詳しいジョン万人次郎は急きよ江戸に呼ばれた。そんな揺れる日本の空気が屋門姫の人生にまで及ぶのである。幕府は開国の条件を少しでも有利にしようとする手この手を考えた。そんな作戦の一端が屋門姫に。なんと、屋門姫をペリーの元に送ることにしたのである。幕府はこの「作戦」に、数人の賢い美女を選びだした。さらにその中から、ペリーと英語でコミュニケーション

日本開国作戦をペリーは考えた。先に中国に対して行つたように日本人に“恐怖”で圧力をかけよう。“友好”を訴えるより利点があると。近代国家の軍事力を見せつけるのが持論であった。一方、幕府はペリーの強硬な姿勢に、品川等の主要港に台場と呼ばれる要塞を構築し、オランダには大量に剣付きゲーベル銃を発注するなど事態は切迫してきた。

A black and white photograph capturing a group of approximately fifteen people seated in rows of simple metal chairs, viewed from behind. They are positioned in front of a white-painted brick building. On the left side of the building, there is a large, stylized graffiti tag. The people are dressed in a variety of casual clothing, including t-shirts, hoodies, and a notable individual in a white dress shirt and dark tie. The scene is set during the day under a clear sky.

会場からあふれて話を聞く参加者

そればかりではない。屋門姫には、  
更なる試練が待っていた。以後、深  
尾の姓を名乗ることも、土佐に帰る  
ことも許されなかつた。つまり、「深  
尾屋門」は、現世から抹殺されて  
しまつたのである。「深尾」が名門  
であるがため、名を惜しんでの处置  
だつたろう。

伊豆下田ではハリスとお吉の悲話  
が伝わる。ペリーと屋門姫の話はそ  
の前にさかのぼる悲話があつたとい  
うことにならう。

さて、永国淳哉さんの話はこれか

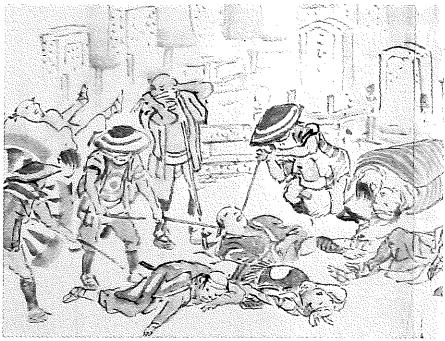


こぼれ話一 犬歩棒当記(二十)一  
「歴史の本質」

宮川  
禎一

坂本龍馬の細部を研究しないがら思うのは「これは歴史の研究なのだろうか?」ということだ。日本近世史の大学教授が卒論指導に際して学生から「沖田総司で書きたいです」と相談された気分を想像されたい。では沖田総司はダメで坂本龍馬なら良いのだろうか? 龍馬を歴史的手法で研究しているが、それは正統な幕末・維新史ではないのではないかと思つ。

ふた昔以上も前に流行したマルクス主義的歴史観では歴史は経済により裏付けられたものであり、人間の役割は低評価である。人間の営みは歴史の発展段階により規定されていて、資本主義が行き詰ると社会主義に至るのが必然であるらしい(懐かしい)。そのような歴史観に立てば龍馬研究のような個人史が歴史の本流であるわけもなく、薩長同盟は龍馬がいよいよがいまいが歴史の必然であつて、ほつておいても出来たのだとの考え方だ。人は歴史にただ動かされているだけなのか(龍馬を低評価)、人は歴史を動かすことができるのか(龍馬を高評価)という命題



150年前、元治元年七月の禁門の変で敗死した長州兵の遺体を鳥辺野に処理する様子を描いた図。『近世珍話』(京都国立博物館蔵)より

に至るのだ。どちらが正しいかではなく、どちらであつて欲しいかという問題だ。

歴史をずっと遠くから眺めればどんな英雄もありの一匹のようなものだ。そのような無情な視点に立てば個人史を研究する意味も分からなくなる。ただし日本史の初めは『平家物語』のような歴史物語から発しており、確固とした歴史観に貫かれたものではなかつた。判官最貞の『義経記』はどうか。その延長上が『竜馬がゆく』ではないだろうか。歴史の中の人間がテーマである。そもそも人間を抜きにして歴史があるわけもなかろう。

龍馬個人を研究しながらも歴史の本質とは何なのかを考へない訳にはいかない。

## コラム・龍馬のこと

# 「小・中学生のための坂本龍馬物語」

現代龍馬学会員 教員 OB 宮 英司

この本は、平成13年3月1日に高知市教育委員会から発行された。

今は亡き松尾徹人市長さんの「龍馬都市宣言」に基づいた取り組みであった。当時は小学校の5~6年生に公費配布され、以後数年間は授業における活用法が研究されたことであった。その後、財政難で公費配布はなくなったが、「龍馬伝」以降、その復活を願う声は根強いと聞く。

高知市の副読本だから、間違いを指摘されないようにと気を配った。事前に龍馬研究家のみなさんにお目通しいただいたが、非常に好意的なものが多かった。表紙をどうするかも悩んだ。末永く家庭に保存してもらいたいとの願いを込めて、驚きのハードカバーにしてもらった。他の多くの副読本が学習後に消えていくが、この本だけは家庭の本棚に凜と座っていてほしいとの想いである。これは坂本家末裔の土居晴夫さんにいちばん喜んでいただいた。

完成した本を手にして喜んだのもホンの束の間。市長秘書の方から電話が入り、桂浜の龍馬像の写真が裏焼きになっているとのこと。真っ青になったのを覚えている。活字は何度も見返したけれど、写真の裏焼きまでは気づかなかった……。しかし、さすがはプロの業者さん。完璧に写真を張り替えて、全く気がつかない出来栄えとなれた。

ひとつ嬉しいのは、当時は「自由民権記念館」だけで市販されていたのが、今は「坂本龍馬記念館」、「龍馬の生まれたまち記念館」、「高知観光情報発信館・とさてらす」の4か所で販売されていること。高知で暮らす人々には、家庭に常備の図書としてぜひ手元に置いていただきたいものである。(定価900円)

ところで、この図書が並べられている傍に鎮座している薄緑色のポップは私の作品です。今度ぜひ見ておいてください。

“話してみるかよ”

「桂浜銅像物語」

現代龍馬学会 井倉 俊一郎

## 桂浜坂本先生銅像物語 Ryouma Mokuma Yosiyasu の土佐人氣質

坂本龍馬 1835 年生まれ 野村茂久馬 1869 年生まれ 入交好保  
1903 年生まれ 龍馬と茂久馬 茂久馬と好保 共に年の差 34 歳。晩  
年の田中伯爵と野村茂久馬翁の多大なる援助で入交好保他青年團念  
願の坂本龍馬銅像が 1928 年（昭和 3 年）5 月桂浜に建設された。

「桂浜の巖頭に碎くる太平洋の荒浪が不斷のみ（盤）を揮って彌りあけたものに、長曾我部があり、維新の志士があり、岩崎があり、浜口がある。中略 第二の坂本でよ。第三の坂本でよ。云々」（坂本先生銅像建設趣意書の一文、この英斷が高知市桂浜が100年以上続く龍馬詣での聖地となつた。）

第二の龍馬である野村茂久馬翁は「どうぞよ、銅像はできるかよ」と名刺に捺印して、第三の龍馬入交好保に自動車フリーパス券を提供する。そして坂本先生銅像建設會長を引き受ける。これにより好保は後ろ盾を得、田中光顯伯爵と面談し、父侯宮より御下賜金を頂くことができた。

土佐の交通王野村茂久馬翁が企画した最大のイベントは商工会議所会頭時代の昭和12年「土講線開通記念南国土佐大博覧会」の開催である。つまり南国土佐大博覧会プロモーションフィルムの制作であった。昭和50年代に放映されたNHK「昭和の回顧録南国土佐大博覧会」によるこのイベントの予算は高知市の年間予算の約三分の一、南はミクロネシアから北は樺太からパピリオンが出ており、奉加帳には山内侯爵、岩崎男爵より各一億円ほどの寄付金があった。現存するフィルムを見ても当時の高知県鶴光の勢いが感じられる。

第三の龍馬である入交好保氏の最大の業績はもちろん坂本龍馬像を桂浜の現在地に建設したこと、そして手結山観光ホテル、土佐カントリー倶楽部、高知龍馬空港拡張ジェット化実現に貢献なったことである。

龍馬 Ryouma, 茂久馬 Mokuma 好保 Yosiyasu RMY 三者の土佐人気質（ユーモア、やると決めたらやる、思いやり、進取の気性）を今平成時代に生きる我々が顕彰すべきではないでしょうか。第四、第五の龍馬を高知から輩出するためにも。

(2015年3月13日午後6時30分より得月楼にて「土佐の交通王野村茂久馬翁の足跡を学ぶ」を開催します。)

高知県立坂本龍馬記念館  
〒 781-0262 高知市浦戸城山 830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015  
<http://ryoma-kinenkan.jp>